

依存症 回復への扉

薬物編

31

「自分もやめたいと思っているが
できなかった。一体どうやったの
か」。今年1月、まだ肌寒いある日、那
覇市首里の更生保護法人がじゅまる
沖繩(当山清治施設長)を訪れた薬
物依存リハビリ施設「沖繩ダルクリ
ハビリテーションセンター」のメン
バーに、寮生が目を輝かせて問い掛
けた。

同施設は刑務所から出所後の一定
期間、社会復帰の準備を整える場。
ソーシャルスキルトレーニング(S
ST、生活技能訓練)の一環で、
対人関係改善に向けてコミュニケーション
能力を養おうと、ダルクメ
ンバーの体験を聞き、その後グル
ープで発言を促す取り組みを行っ
ている。

「誰か止められ泣きながら薬

を打っていた」。メンバーは淡々と、

しかし率直にかつての体験を語っ
た。その言葉に導かれるように、寮
生も自分の気持ちを口にした。「父
親に酒の問題があつて、自分は絶対
そうなるまいと思つたのに、同じに
なつてしまった」「社会に出たらま
た飲んでしまうかもしれない」。

最後の感想では「感動した。社会
に出ても頑張ろうと思つた」「ずつ
と皆さんを見続けていきたい」との
言葉があつた。

体験をつなぐ

薬の怖さ語り連鎖絶つ



寮生たちに自らの薬物依存
経験を話すダルクメンバー
＝那覇市首里・更生保護法
人がじゅまる沖繩

当山施設長は「寮生に何か劇的な
変化が見られるわけではないが、自
分の気持ちを相手に伝えることを学
び取っているように見える。話を聞
きながら自分の来し方も振り返り、
言葉足らずなところもあるけれど、
絞り出すようにして発言している」
と話す。

ダルクは、県のDV加害者対策事
業として毎月行われているDV防止
講座にも協力。薬物を使つていたこ
ろに加害経験がある者として、ま

苦しき共有「やめる」糧に

た、幼いころの心の傷つきが人生に
与える影響などについて、当事者の
言葉だからこそ伝わる重みが、講座
参加者により刺激を与えている。

ダルクに限らず、回復を目指す依
存症者による啓発活動は県内でもさ
まざまな形で行われている。NPO
法人アルコール・薬物依存症リハビ
リセンター琉球G A I A (ガイア)
は、刑務所での薬物離脱指導のほか
学校、保護観察所などで講演を実
施。薬物依存の自助グループNA
(ナルコティクス・アノニマス)は
病院、アルコール依存の自助グル
ープも、病院や刑務所に出向き、体験
を伝えるなどしている。

薬物依存の経験は決してよいもの
ではない。だが、回復を目指す中で、
逆に社会に貢献し、人のために役立
つこともできる。

(月)水曜日掲載
(岡部ルナ)

「意見・感想は学芸部へ」班、電
話0980(0900) curashimail
kurashi@okinawatimes.co.jp